

【カンボジア特集】

「トランセンド・グローバル・ミーティング： 21世紀の平和構築」参加報告¹

藤田明史・伊藤武彦・奥本京子・室井美稚子

カンボジアのプノンペンで、2009年5月4日～8日に開かれたトランセンド・グローバル・ミーティングに、日本から4名が参加した。参加者は総勢約40名、われわれの他、ノルウェー、オーストリア、ドイツ、イタリア、フランス、米国、ブラジル、アルゼンチン、オーストラリア、インド、ミャンマー、スリランカ、フィリピン、そしてカンボジアから参加した。主たる会場はCPCS (Center for Peace and Conflict Studies) の2階のワークショップ・ルームで、CPCSは、道路を挟んで、われわれが宿泊したホテルのすぐ向かい側にあり、2つのNGOが同居する2階建ての黄色の建物である。道路には車やバイクが早朝からひっきりなしに走り、会議中も（とくに最初は）騒音がやや気になった。

5月4日（月）午前9時、いよいよ会議第1日目の始まりだ。まず、ホストのCPCSのエマ・レスリー氏により、続いてカンボジア代表としてソット・プライ・ニャーム氏から歓迎の挨拶があった。この2人とは、2005年5月にルーマニアのクルージ・ナポカで開かれた「トランセンド国際会議」で藤田は会っており、あれから4年、このカンボジアの地で様々な平和活動が活発に行われていることに大きな感銘を受けた。その行動力に感嘆せずにはいられない。自己紹介のワークが続く。全員が立ち上がり、動き、出会った人に自分を紹介し合うのだ。コーヒブレイクのあと、最初のセッションはガルトウング氏による基調報告だ。

「地球存続のための10のポイント」と題するレジュメには、「しかし自然はまた、野蛮な場所でもある。ゆえに人事に関する物事の道徳的な指針として『衡平』ということが求められる。それは、相互的で平等な利益のための『共生』を意味する」とあり、一見、老子を思わせる言葉が出てきて、なかなか面白い。暴力の概念を自然のそれにまで拡張しようとするガルトウングの最近の試みの一端が、こうしたところに現われているように思える。いつもの通り、話は飛躍し、脈絡をつかむのがとても困難だ。しかし、中心的な話題は、アメリカ帝国の没落についてであったように思う。それは、地球社会の「動的進化」＝「複雑性の増大」にとって望ましいに違いない。こうした文脈において、オバマの行動はどう評価されるのか。対話や交渉といった面においては及第点、しかし精神的な力(soul force)や経済の面においては落第点ということのようだ。これに関連して、核廃絶に関するオバマのプラハ演説の評価について伊藤が質問した。それに対しては、リップサービスのレベルで受け取っている、といったやや素っ気ない回答であった。全体として、米国に

よるヘゲモニーの維持という点に関わって、ガルトゥングはオバマ政権に対してかなり厳しい見方をしているように思われた。

昼食は2階のベランダで、立食式ケータリングのカンボジア料理だ。とても美味しい。

昼からの部は、やはりガルトゥングによる「トランセンドを紹介する——それは何か、なぜトランセンドか、どこにあるのか、それはいったい何者か」と題するセッションから始まった。それは、トランセンド・メンバーへの基本的な問いかけであるとともに、参加していた地元のカンボジア人のNGOワーカーへのトランセンド入門をも意図されたものだった。

1993年にガルトゥングが「トランセンド」を立ち上げた時のネガティブな経験から話が始まる。ノルウェー政府の資金援助も大学の支援も得ることができなかった。すなわち、「安全保障」とは全く異質な「平和」の概念について理解が得られなかったのだ。ゆえに、それ以降は、自立的な組織として次の4点を柱に歩を進めてきた。第1は、行動 (action) である。調停・和解・平和構築に焦点を当てた活動であり、現在はトランセンド・ピース・サービス (TPS) と称している。第2は、教育 (education) である。これには、トランセンド・ピース・ユニバーシティ (TPU) とサボナ (SABONA) の活動がある。後者は学校におけるコンフリクト・リテラシーの向上を目指している。またこれに付随して、トランセンド・ユニバーシティ・プレス (TUP) も立ち上がっている。すでに6冊の本が出版され、4冊が間もなく出版の予定である。第3は、広報・普及 (dissemination) であり、アントニオ・ローサをエディターとしてトランセンド・メディア・サービス (TMS) がすでに機能している。第4は、研究 (research) であり、トランセンド・リサーチ・インスティテュート (TRI) の設立が今後の課題である。

トランセンドは、基本的にはメンバーと各地域のネットワークである。しかし、小さなセンターとしてトランセンド・インターナショナルがあり、今後はスイスのバーゼルにオフィスが立地することになっている。また、各地域のトランセンドの活動も活発に行われている。ガルトゥングとしては現在、とくにアフリカに注力しているということだ。

このように、トランセンドの歴史と現状の詳細にわたる説明が行われた後、エマの発意で全員が小グループに分かれ、トランセンドの「旧人」と「新人」が直接に話し合う場もたれた。

その後に、藤田は、次のような質問をガルトゥングにしたので記しておきたい。TUP から出版予定の4冊の本の題名は次のようだ。①『紛争の理論—直接的暴力を克服する』、②『開発の理論—構造的暴力を克服する』、③『文明の理論—文化的暴力を克服する』、④『平和の理論—直接的・構造的・文化的平和の構築』。質問者の疑問は次のようだ。たとえば①において、紛争から暴力が発生するとして、その暴力は直接的暴力だけではなく、構造的・文化的暴力をも含むに相違ない。だとすれば、副題はなぜ「直接的暴力を克服する」なのか。質問者にとって少なくともこれは「混乱的」であると表現した。単に誤解かもしれないものの、もしかしたら多少の真理を含んでいるかも知れない—こう考えて思い切って質

問をしてみたのだった。ガルトゥングの回答は次のようであった。暴力の行為があり、その暴力の根源にまで考えを致すとき、ほとんど 99% の場合が未解決のまま放置される。すなわち、そこには direct conflict に加え structural conflict があるといえる。しかし、この structural conflict は主として『開発の理論』で扱うことにしたのだ。したがって、『紛争の理論』では direct conflict を扱うことになった。この場合、副題に「直接的紛争を克服する」とするのは誤りである。紛争概念の中に直接的紛争が含まれているからだ。このような direct conflict や structural conflict の概念を明確に定義するには、紛争の構造に関わる「複雑性の次元」(dimension of complexity) の概念が必要となる。質問者はこれまで direct conflict や structural conflict という概念を考えたことがなかった。確かに、こうした概念の導入によって、暴力概念と紛争概念の関係を具体的に分析できそうな気がしてくる。この点はもっと考えてみたいと思う。

さて、初日の最後のセッションは、ノルウェーのシノーヴェ・ファルダーレン氏による SABONA のワークショップだ。SABONA とは "I see you." という意味であり、家庭や学校や職場で試みられている教育法である。SABONA の話を詳しく聞くのは藤田にとって今回が初めてである。ここでは印象を記すにとどめる。たとえば、「トランセンド」の概念を小学生にわからせるにはどうしたらいいか。大学生であれば、概念を用いてわからせることができる。しかし、相手が小学生の場合、そうはいかないだろう。できるだけやさしい言葉で、しかも、体を動かしながら教えないと、本当にはわかってもらえないだろう。これは簡単ではない(少なくとも藤田にとって)。いや、きわめて難しいに相違ない。ファルダーレンさんの話から、彼女の苦勞のほどが伝わってくる。しかし良く考えれば、われわれの理解も、こうした苦勞を経験し克服した上でないと本物にはならないのかもしれない。SABONA のような試みをこの日本社会でわれわれとしても行わなければならないのだ。ここにもわれわれが挑戦すべき大きな課題がある。

翌日の 5 月 5 日 (火) 午前 9 時より第 2 日目のワークショップが始まった。9 時から 10 時半までの最初のセッションのテーマは「COPCEL の活動に焦点を当てたカンボジアの政治的平和プロセス」である。運動の中心人物であるオク・セレイ・ソフィーク氏が報告を行った。この人は、カンボジアにおいて、政治活動も含めた社会運動を長年に渡り主導してきた人物である。

まず歴史的な背景の説明があった。カンボジアは歴史的にフランスの植民地時代から、クメール・ルージュ (赤いクメール) と呼ばれた波尔・ポト政権時代に至るまで多くの苦難を経験してきた。特に波尔・ポト政権下では百七十万人のカンボジア人がいわれなく拷問を受け虐殺されてきた。1979 年に波尔・ポト政権が崩壊してからも、クメール・ルージュの地方支配は続き、最終的に武装解除されたのは 1998 年のことである。

カンボジアの平和運動の指導者としては、カンボジアのガンジーとも称される仏教僧侶のマハー・ゴーサナンダ師が著名である。波尔・ポト派による虐殺と内戦で荒廃したカンボジアで、非暴力による平和の実現を訴えカンボジアの平和運動の先頭に立った人物である。ほとんどの僧侶が波尔・ポト政権によって殺害された。そのような惨劇の後で、カン

ボジアの復興と平和に仏教の果たした役割は大きかった。

ポル・ポト政権が崩壊しても、様々な政治的困難があった。選挙によって民主政治を確立することと、クメール・ルージュの支配地帯での和解と平和構築をしなければならないという課題があった。

ソフィークは COPCEL (Conflict Prevention in the Cambodian Elections) としてチームを組んで、地方のクメール・ルージュの指導者のところに対話に行った。指導者は、最初は強面で威嚇的であったが、報復のためではなく住民の福祉や地域開発のために対話に来たことを氏が話すと、ほほえみを浮かべ、氏を先生と呼ぶようにまでになった。地域の開発のためのスライドを見せながら、ソフィークは旧指導者との和解と地域振興の活動を熱心に紹介した。行動原理として、面子を尊重すること、表現の自由、安心な環境、面接はテープ録音して発言に責任を持つ、などを実践している。カンボジア的解決法は、〈対話・対話・対話〉につきるといふ話は、トランセンド的で大変共感できた。伊藤は氏に、小中高の教育カリキュラムの中に対話が入り入れられているのかどうか質問したが、取り入れているということではなかった。やや期待はずれであった。しかし報告自体は、平和のプロセスとは地道で粘り強い、また勇気ある取り組みであることを示しており、大いに感銘を受けた。氏ご自身が親族を殺されていることもさりげなく紹介されていたが、他のカンボジアからの参加者にはそういう人が多く、これには心が痛んだ。

午前の第2セッションは、全体を2つに分けて行われた。少人数のワークショップ形式で進めることで、さらに議論が弾むとの意図からの企画であった。伊藤は、場所を変えてホテルの会議室に移り、ACT (Alliance for Conflict Transformation) の共同所長であるメアス・ソケオ氏の「ナショナリズムと民族的アイデンティティ」のワークショップに参加した。

大量虐殺の犠牲者になった人々の中に、ベトナム系住民や少数民族のカンボジア人たちが多くいた。そして今、新しい国家の再生についても、民族間のコンフリクトを非暴力的に解決することが課題となっている。このような問題意識から ACT は 2007 年に『平和研究：カンボジアにおける民族間関係と国民のアイデンティティの理解』という調査研究報告書を発行した。ソケオはこの研究プロジェクトの責任者である。また自身がチャム・ムスリムという少数民族の一員である。この調査では、カンボジアに住む民族をクメール人、華人、タイ人、ベトナム人、チャム人、など 8 民族に大きく分類している。多数派であるクメール人以外の少数民族は、国籍のないことから選挙の権利が奪われるなど、実質的な差別を受けてきている。それで民族間の平和と偏見低減のための教育訓練プログラムを、民族間平和構築のための教育訓練プログラムに統合したワークショップを全国的に行っている。NGO のスタッフも参加して、民族間の平和構築のプログラムを、中等学校教員や、教員養成課程や社会科教員に対して実施してきている。それまでは根拠のない噂に惑わされて暴力が起こったこともあったが、2008 年の選挙では噂による暴力問題が減ったという。人々の態度や認識を変えることが重要であると、ACT からカンボジア教育省に働きかけもしている。

その後の議論では、マイノリティの言語によるテレビ放送などの意義、隣国タイとの国

境問題などが話題になった。カンボジアはベトナム・ラオス・タイと地続きで国境を接しており歴史的に民族間コンフリクトが絶え間なくあり、現在でも国家の新生に民族間の平和構築を行うことが不可欠であることが分かって大変有益なセッションであった。とりわけ偏見低減の課題は、伊藤の現在の問題意識でもある。「カンボジア人＝クメール人」とついつい考えがちなステレオタイプの理解を反省させられた。

藤田と奥本は、並行して開催された、「暴力後のカンボジアにおける積極的平和創造のためのコミュニティの和解」についてのワークショップに参加した。報告者は、フィ・ラムドゥール氏という実践家である。カンボジアにおける暴力の歴史の中で、彼女も例外ではなく家族・親戚を亡くしている。しかし、その苦痛を、ひとまずは横において（ラムドゥールは「忘れて」という言葉を何度も何度も繰り返した）、共同体である村における和解を推進しているという。自分たちを虐待し殺戮したクメール・ルージュのメンバーと、同じ場所で暮らしていかなければならないし、子どもの世代のために平和を創造しなくてはならないという、ある意味、「緊急事態」において、その平和の仕事は必要不可欠である。報告の内容そのものよりも、ラムドゥールに代表されるカンボジアの人々の、平和への思いが、いかに強く勇敢なものであるかが、ずっしりと胸に來た。

翻って、戦後の日本を思うとき、悲壯感に満ちた日本の人々は、戦後の平和創造というものが、緊急に取り組まなければならない仕事だと本当の意味で目覚めていたのだろうか。もちろん、現在のカンボジアでは、和解の作業がとてもスムーズに進んでいるわけではない。平和教育や歴史教育に、十分な時間と労力がさかれているとは到底言えず、どちらかというと、若者はみな、コンピュータ技術、英語、ビジネススキルの習得に奔走しているという。余りにつらい過去であるので、それを語ること自体はタブーでもあり（カンボジアの文化でもあるらしい）、クメール・ルージュの時代の経験者と、若者との間に、大きな溝ができていても聞いた。しかし、今回の会議で出会った様々な活動家の人々は、大変な勢いで平和の仕事を進めている。学校の正規の授業で取り上げることができないならば（カリキュラムの制限のため）、NGOがやろうじゃないかとばかりに、たくさんの学生・生徒向けのプログラムを作成し、紛争転換・紛争解決・平和構築の活動を推進している。日本が、そこから学べることはたくさんある。

昼食は、ケータリングのカンボジア料理で、野菜や魚がたくさん入っている。おかわりも自由。タイ料理よりはマイルドな味でわれわれに向いていると思った。果物も種類が豊富で、参加者一同、大変気に入っていた。

午後の前半のワークショップは、伊藤・室井・奥本は、ヨルゲン・ヨハンセン氏の「平和的な手段によるコンフリクトのエスカレーション：変革のための非暴力の活用」に参加した。氏の平和の定義は「創造性と共感によりコンフリクトを非暴力的に扱う能力」だ。コンフリクトを予防することや、コンフリクトを無くすことを平和とは呼ばない。コンフリクトのエスカレーションが重要なのだ、と主張する。コンフリクトのエスカレーションとは、市民的不服従などの運動により、市民社会が強権的政府を打ち倒したり、政策変更

を勝ち取るためのプロセスといったイメージだ。市民的不服従の写真記録が発表の中で多く紹介された。スライドに出てくる写真のひとつひとつが興味深く、サンタクローズやピエロの姿でのデモ（ドイツ）や、お尻を見せての抵抗（ケニア）など傑作なものも多かった。コンフリクトのエスカレーションのための市民的不服従活動については、記録すること、評価すること、普及すること、の3つが重要である。

以上のような説明の後、参加者全体の議論は、「エスカレーション」という概念と表現をめぐって行われた。伊藤も「エスカレーション」という表現では、他人事のような響きがあり、コンフリクトの促進とか深化とか他の表現は無いだろうかと提案してみたが、議論はなかなかしっくり来なかった。しかし市民的不服従の重要性を再認識する良い機会となった。

この間、藤田は「ひろしまハウス」を探しに出かけたが、なかなか見つからず、暑さのせいもあり、くたびれ果ててしまった。（本号掲載『「ひろしまハウス」探訪記」参照）

午後の後半のワークショップはディートリヒ・フィッシャー氏の「自己調整的過程としての平和」であった。彼の得意技はジョークである。報告内容にそって、ジョークを交えながら解説するのである。ところがこのジョークがなかなか理解できず弱ってしまった。このような内的なコンフリクトが起こると、伊藤は、報告内容に集中できない弱点を持つ人間である。本人の内的自己調整機能がうまくコントロールできないという事態に陥ってしまった。ワークショップの内容は、法律のシステムで社会が維持されているように、人体においては免疫システムがエイズなどの病気をコントロールしている。そのような自己調整フィードバック機能には3つの要素がある。フィードバックシステムが、うまく機能しない場合を6種類に分類することができる。ペルーとエクアドルの国境問題、コソボ問題、ボスニア戦争、貧困問題、中国の飢饉、オゾン層破壊問題などが、この枠組みから解説された、とノートにはあるが、今になっては詳しい内容が思い出せないのが残念である。

夜は場所をパニャサストラ大学に変えて、ガルトゥング氏が公開講演を行った。この大学のホームページを見ると「非暴力的手段によりコンフリクトを解決する平和な世界を想定する」という理念が述べられている。聴衆の中には多数の学生がいた。講演の題は「国と人はどのようにより豊かになるか」であった。日本のアカマツ・カナメ（赤松要）の理論がリカード理論とともに紹介された。日本、キューバ、ベネズエラ、イスラム圏、中国などの例をひいて、それぞれの経済発展の特徴と豊かさの類型を示した。最後に、西洋モデル、日本モデル、ソビエトモデル、イスラムモデルの特長と欠点を述べ、どのような方法をカンボジアは採用するのかを問いかけた。豊かさの問題は、現在の日本では、格差社会是正の問題として議論されている。しかし、歴史的・全地球的枠組みから豊かさをとらえて議論する必要がある。この意味でガルトゥングのこの講演は刺激的であった。話を聞きながら、伊藤の個人的問題意識から、北海道の浦河町で精神障害者たちが仲間同士助け合いながら生活している「浦河べてるの家」の豊かな仲間関係や、人類史的に人間のあり方を問う進化医学や進化心理学や人類学的な見地からの思索をもふまえた、平和と豊かさの問題を考えていきたいと思った。

このあと大学近くのレストランに行き、民族音楽を聴きながらカンボジア料理を楽しんだ。かくして2日目は終わった。

第3日目の9:00~10:30は、2つのセッションに分かれた。伊藤と藤田は、インドのウダヤクマール（クマール）氏の「21世紀における平和構築に対する核の脅威」のワークショップに参加した。インドの核実験や核燃料・核兵器の材料となるウラン鉱山の汚染の問題がビデオによって上映された。ウラン鉱山の労働者や周辺住人からは大人のガン患者や子どもの障害児が多く出ている。核兵器のみならず原子力発電所もその廃棄物も含め大変危険である。将来は核のない未来をつくるようにしなければならないという報告であった。伊藤は日本の横須賀基地が米軍の原子力空母の母港となることにより、首都圏地域が核汚染の危険にさらされている問題を取り上げ、核の軍事利用は核兵器と動力エネルギーとしての原子力利用の両方を含むことを発言した。藤田は、核攻撃を経験した日本に現在50基以上の原発が稼働している「矛盾」に関して、日本は「原子力の平和利用は可能だ」との前提で核エネルギーの開発を進めてきたが、世界の戦争体制の下においては原子力の平和利用は不可能であるということが、歴史を踏まえた日本の教訓として言えるのではないかと発言した。

奥本・室井は、ミャンマーでの活動報告のワークショップに参加した。報告者の身元を公表できないので、シジルという名のミャンマー活動家と、カンボジア人支援者の2人による報告とだけ書いておく。彼らはサイクロンの被害にあった各地において、被害支援を通して人々と交流し理解を深めるという作業を通して、どういう知見を得たかという話をしてくれた。キリスト教宗教学者であるシジルは、仏教徒の地域に入り、「正義」とか「平和」とかいった政治的に問題のある言葉は使わず、信頼構築の仕事をするのだという。カンボジア人の報告者は、ある紛争転換のNGO（トランセンドではない）を通して1999年からどう関わってきたかの歴史を語った。

11:00~12:30も、同様に2つのセッションに分かれた。1つは、われわれのセッションであり、シンプルに「日本における紛争転換」と題し、奥本と藤田が担当し、伊藤も出席した。参加者は、15人ほどであったらうか、ガルトウング氏もサポートしてくれ、中身の濃い時間であった。トランセンド日本（トランセンド研究会）の成り立ちと、トランセンド東北アジアについての紹介から始まり、韓国とのつながりについての話を交えながら、東北アジアの状況を報告した。さらに、トランセンド日本としては、教育、普及、研究、実践の4本柱にそってどういった活動を展開しているかとの話の中で、東北アジアの状況と、日本の戦前・戦中・戦後の問題点から、日本における実践とは、まさに教育と普及であり、そういう意味において、市民に対するワークショップや、学校における授業を多数実践することは、平和の文化・構造を構築するためにも不可欠であると主張した。また、プロジェクトとしては、例えば、「朗読劇プロジェクト」があり、ガルトウングのテキストを活用しながら進めていることを報告した。そこにおける問題意識とは、二項対立型の思

考を転換すること、「被害者」と「加害者」の区別とそれをいかに克服するかについて考えること、「謝罪」や「責任」の意味についての理解を深めること、「和解」という言葉を「加害者」側が使用することの傲慢などである。また、和解の前提となる国家の相対化という文脈において憲法9条や峠三吉の詩を紹介し、日本を含む東北アジアからの視点を明確にしようと試みた。藤田は、前日に訪れた「ひろしまハウス」に言及した。イタリア出身の参加者は、先の世界大戦に関して、イタリアには「謝罪」という概念が希薄であり、日本との比較からもう少し考えてみたいと発言した。ノルウェーからの参加者は、奥本の「日本がく和解」の作業のリーダーシップを取ることに疑問を受けて「そういわずにどんどんやればいいよ」と励ましてくれた。こういった国際会議では、それぞれの体験を分かち合うことで非常に勇気付けられるし、違いもはっきり見えてくることもあり、有意義だ。

室井は、フィリピン出身のバート・ラトゥン氏によるワークショップ「武術や伝統術のギャングと共に東ティモールの政治的危機を顕在化する」に参加した。東ティモールでの紛争は表面的には収まったかのように見えるが、その紛争が残した暴力的な雰囲気は社会全体を覆っていた。多くの人々は自衛のために武術（マーシャルアーツ）を学び、それぞれにグループを成している。何か事があると暴力で解決しようという姿勢が蔓延していることに危機感を抱き、これにまっすぐに対峙したバートとエマの取り組みはまさに命がけと言えよう。二人は、各武術グループの主たるメンバーを集め、1週間のピース・ワークショップを行った。集まれば喧嘩になりかねないところをコントロールしつつ、信頼を構築する（トラストビルディング）ワークを行うのは並大抵ではなかったようだ。しかし、その甲斐あって最後には武術グループをあげてのピースマーチを企画するところまで達した。そのマーチを恐る恐る見守った警官の言葉が印象的であった―「もしもこういうことが進めば、自分は夜もつと家族と団らん出来る」。バートはこのコメントを満面の笑みを浮かべて報告され、その苦勞がしのばれた。信じられないことに、その動きは今年になって、軍までをも巻き込んだの国を挙げたピースマーチへと成長した。ここまでの一石をピースワーカーが投じることができたのも、やはり人々の根底に強い平和への願いがあるからこそであると再認識でき、大きな力を得た。

3日目の午後からは、地域コンベナーによるビジネスミーティングが続き、それを受けて、4日目の朝からは全体のビジネスミーティングに引き継がれた。いくつか決定したことや、課題などを箇条書きで報告しておきたい。

1. 「トランセンド」の正式名称を少し変更する。「TRANSCEND, Network for Peace, Development and Environment」と、「Environment」を加える。

2. トランセンド国際オフィスを、スイスのバーゼルに置く。今後は、World Peace Academy、バーゼル大学、それにTPUが連携し、単位を出すなどして「教育」部門を展開していく。

3. トランセンド国際総会は、今後毎年実施の方向で考える。次回の予定地はシドニー大

学にて、日程は2010年7月6～10日のIPRA開催の直前の3～5日に予定する。IPRAにおいても、トランセンドとしてセッションを準備する。次々回はバーゼルか、日本か、メキシコなどを候補地とする。

4. ウェブサイトやTPU参加者の名簿などの管理について、今後の課題とする。

5. TPU/TUP/TRI/TMSに関しては、上記の報告の通りであるが、TPUに関しては、4. に連携して議論を進めていくこととする。第一段階としては、トランセンド国際メンバー全員にアンケートをとり、TPUにおいても活動してもらえるシステムづくりを目指す。日本からは奥本がTPUプロジェクトチームに関わっている。

6. トランセンド・アジアとして、インドから参加したS. P. ウダヤクマール(クマール)氏を中心とし、トランセンド南アジア、トランセンド・カンボジア/東南アジア、トランセンド東北アジアがどのように連携していくかは今後の課題である。ひとまずは、日本からのカンボジア・スタディツアー企画により、交流を深める(本号別掲の室井報告を参照のこと)。徐々に、東北アジアと東南アジアの交流という枠組みの中で、トランセンド・コリアにも声をかける予定である。トランセンド・アジア全体としての今後の可能性も引き続き模索することとなった。

注

注1) この報告書は、第1日目は藤田が、第2日目は伊藤が、第3日目は奥本と室井が主に執筆した。また、ビジネスミーティングに関しては奥本が執筆した。